

# 明石女子師範学校附属校園における幼小連携 —「保育方針並ニ幼稚園内規」と明治期の幼稚園カリキュラム—

杉 浦 英 樹\*

(平成21年9月29日受付；平成21年10月30日受理)

## 要 旨

明石女子師範学校附属校園は主事及川平治のもとに大正自由教育の実践を展開したことで教育史上有名である。同校園では1904（明治37）年の創設当時からすでに幼小間に職務上、研修上の交流があり、1924（大正13）年には及川の指導によってプロジェクト法に基づくカリキュラム連携が試みられようとしている。筆者の目的はその経緯を明らかにすることにある。

本稿では「保育方針並ニ幼稚園内規」を含む附属幼稚園所蔵史料の内容をめぐる解釈を通して、明治期における幼稚園カリキュラムの開発過程を保姆の視点から記述する。そして幼小教員が対等に交流するという当時としては稀有な状況で、同園のカリキュラムがどのようなものであったかについて、附属小学校の教育方針や及川の見解との関係において検討する。

## KEY WORDS

Cooperation between Kindergarten and Elementary School 幼小連携

Kindergarten Curriculum 幼稚園カリキュラム

Affiliated Kindergarten to Akashi Women's Normal School 明石女子師範学校附属幼稚園

Heiji Oikawa 及川平治 Tsuna Imai 今井つな Gift 恩物

## は じ め に

明石女子師範学校附属小学校・幼稚園は、主事及川平治のもとで大正自由教育を展開した校園として有名である。同校園では早い時期から本格的な幼小連携の試みも行われている。筆者の目的はその具体像を明らかにすることにある。

幼小教員が互いの免許を併有するとともにそれぞれの教育の独自性を理解し、共同研究に耐える資質や力量を備えていること、敷地が同一ないし隣接し、教員や子どもの交流と協議を容易にし得ることなどは、現在も連携のうでで無視し難い条件であるが、戦前においては女子師範・師範女子部の附属幼稚園や私立幼稚園の一部が比較的これらの条件を満たしていたと考えられる。その中でも明石は同一敷地内に師範と附属校園が併立し、校園教員には師範同窓の訓導と保姆を擁し、かつ修了園児の殆どが附属小学校に進学するという恵まれた状況で、日常的に交流や協議をなし得たまれな例であった。

ただしさらに進んでカリキュラム連携を果たすためには、何らかのコンセプトのもとに方法原理が共有され、双方に閉じられた教育内容が互いに開示され、実践が内部から変革される必要があるだろう。明治末期から大正期にかけて、進歩主義の受容による幼稚園のフレーベル主義・小学校のヘルバルト主義の克服とカリキュラム改造の取り組みは、すでにプライマリー級と幼稚園が相即的に運営されていた合衆国のカリキュラム開発の紹介を通していっそう啓発されている。明石の場合、そこに発した子どものプロジェクトというコンセプトが、幼小の指導者たりえた主事及川を介して教員たちに伝えられ、双方の教育を橋渡しする契機になっている。

同校園のカリキュラム開発の経緯について幼小の関係を念頭に検討しているのは、現在のところ橋本（2009）<sup>1)</sup> だけである。橋本は及川を介した海外の教育情報の影響という視点から、幼稚園カリキュラムの開発過程を包括的に明らかにした。しかし及川が提示した情報やそれ以外の情報をより具体的なレベルで保姆や訓導がどのように受け止め、カリキュラムに還したかについての検討はまだなされていない。筆者は幼小それぞれの教員のうち、特に幼稚園保姆の視点からそれを記述していくことにしたい。

同園には1904（明治37）年10月の創設時から保姆らにより記された日誌や「保育方針並ニ幼稚園内規」「幼稚園経営」「保育単位ノ生活カリキュラム」等の史料が残されている<sup>2)</sup>。これらに依拠するこれまでの研究としては久保

\*学校教育学系

(1970, 1971)<sup>3)</sup>, 志村 (1979)<sup>4)</sup>, 橋川 (2003)<sup>5)</sup> によるものがある。しかしそれらはいずれも所蔵史料全体を扱っていないため、実践の主体である保姆の視点からカリキュラム開発の経緯と具体を十分に綴るまでには至っていない。

同園では1918 (大正7) 年に「為て悟る主義」の徹底を図るため保育科目の改定がなされるが、それに先立ち、①園独自の教育方針とフレーベルの恩物を用いた実践の定着、②モンテッソーリ教育研究とそれへの対応という二つのエポックがみられる。それは同園におけるプロジェクト法導入の前提となる状況を形成していると考えられる。そこで本稿ではまず、「保育方針並ニ幼稚園内規」をはじめとする1917 (大正6) 年に至るまでの同園所蔵史料の整理を行う。そして主として日誌史料の内容に基づいて①をめぐるカリキュラムの具体を可能な限り記述しながら、幼小教員が対等に交流し得るという当時としては稀有な状況において、保姆がどのようなスタンスで実践を行っていたかを明らかにしたい。②をめぐる状況やそれ以降のカリキュラムの検討については別稿で行うことにする<sup>6)</sup>。

## 1 明石女子師範学校附属幼稚園における幼稚園保姆と日誌史料

創設以来1917 (大正6) 年まで同園に在籍した保姆等は【表1】<sup>7)</sup>, また日誌史料を整理すると【表2】のようになる。

以下、この二つの表を比較参照しながら、本稿が対象とする明治期における日誌史料の執筆者と体裁を示すとともに、各史料に書かれた内容と保育の特徴を記述する。また長らく創設当初のものとされてきた主要史料である「保育方針並ニ幼稚園内規」<sup>8)</sup>の検討を行い、同規程の制定前後における同園のカリキュラムについて幼小の関係を念頭にみていく。

## 2 「保育方針並ニ幼稚園内規」制定前の幼稚園カリキュラム

### 2.1 日誌史料 [1904 (明治37) 年～1909 (明治42) 年] の概要

まず創設時における日誌史料の執筆者と体裁を記す。

「明治三十七年度保育日誌」 豊崎が欠席時の筆跡で全体を通してのことから、中澤による記述と推定される。日付、曜日、天候を付して各日の保育の流れが遊戯、唱歌、談話、手技の内容を含みながら記されている。毎日記されているが、1月23日から27日までと2月7日以降の分が欠落している。

「明治三十八年度保育日誌」 主として中澤が記したとみられるが、それ以外の者による記述を含む可能性もある。前年度と同様、各日の保育の流れが遊戯、唱歌、談話、手技の内容を含みながら記されている。翌年に同園に赴任する松尾が教生として保育する様子もみられる。4月17日から22日、5月4日から6日、同9日から6月6日までの分が欠落し、それ以降途切れがちになる。最後の7月8日は日付以外の記述がない。中途までなのは年度半ばで退職した中澤から引継ぎがなされなかったためであろう。

【表1】明石女子師範学校附属幼稚園保姆等 [1904 (明治37) 年～1917 (大正6) 年]

年 度	校 長	主 事	主 任	保 姆 (年少組)	保 姆 (年長組)
1904 (明治37)	10月～ 藤堂忠次郎	10月～ 伊賀駒吉郎	10月～ 高谷一次	10月～ 中澤よし	10月～ 豊崎梅
1905 (明治38)	藤堂忠次郎	伊賀駒吉郎	高谷一次	豊崎梅	～9月 中澤よし 10月～ 中村イウ
1906 (明治39)	藤堂忠次郎	～12月 伊賀駒吉郎 12月～ 友國繁重郎 (主事心得)	～12月 高谷一次	中村イウ	～7月 豊崎梅 8月～ 松尾(大西)とみゑ
1907 (明治40)	藤堂忠次郎	10月～ —	3月～ 赤井勝次郎	松尾とみゑ	威徳寺たみゑ
1908 (明治41)	藤堂忠次郎	—	會沢(立野)タガエ	今井つな	～9月 松尾とみゑ 10月～ 山本(福井)とみゑ
1909 (明治42)	井田竹次	—	會沢タガエ	安保(渡辺)元	今井つな
1910 (明治43)	井田竹次	—	會沢タガエ	今井つな	前田こよし
1911 (明治44)	井田竹次	—	會沢タガエ	前田こよし	今井つな
1912 (明治45)	井田竹次	及川平治	會沢タガエ (～1月, 以降, 主任廃止)	今井つな	井田きのゑ
1913 (大正2)	井田竹次	及川平治	—	井田きのゑ	今井つな
1914 (大正3)	井田竹次	及川平治	—	今井つな	～10月 井田きのゑ 11月～ 杉山(富村)久
1915 (大正4)	井田竹次	及川平治	—	杉山久	伊賀あい
1916 (大正5)	井田竹次	及川平治	—	永島(守邦)かをる	杉山久
1917 (大正6)	井田竹次	及川平治	—	杉山久	栗林(岡部)ふさ

「明治三十九年保育日誌」 表紙には「三十九年」とあるが1907（明治40）年度の内容である<sup>9)</sup>。威徳寺は5月30日から6月末日まで、松尾は7月5日から、それぞれ病気のため相次いで欠勤した。交替で記したものとみられ、他の者が一部を記した可能性もある。前半と後半とからなり、前半部分には各日の保育全体の流れが記され、また後半部分には会話、唱歌、遊戯の項目ごとに各日の保育内容が箇条書きされている。いずれの部分においても手技の内容が見当たらない。また前半は5月10日から15日までの欠落をはさみ10月4日まで、後半は12月2日までの記述で、後は途切れている。

「明治四十二年度保育日誌」 安保と今井による記述であるが、7月21日から24日までは複数の教生による記述とみられる。旅行、園芸のほか遊戯、唱歌、談話、手技等の内容を含みながら一日の保育の流れが記されている。小学校主事の及川が一週ごとに押印し内容を確認している。6月19日まで「第二時は」「第三時は」と平板な書き方であったのが、及川の指示によるものか、翌週21日から日常の保育の流れの様子を情緒を込めて記す仕方へと一変する部分も見出される。

## 2.2 1904（明治37）年～1909（明治42）年におけるカリキュラムの内容と特徴

これらの日誌史料の記述内容からこの時期のカリキュラムの内容をみると次のようになる。

創設当初は10月だけでも「積木」「板ならべ」「箸ならべ」「環ならべ」「画き方」「貝ならべ」「麦藁」「摺み紙」「粘土」等を扱っている。恩物を満遍なく用い、順序立てず比較的自由に手技を行っていたことがわかる。直接に確かめることはできないが、細目を伴う保育だったとされている<sup>10)</sup>。少なくとも1905（明治38）年頃まで、手技を中心に遊戯、談話、唱歌で構成された保育内容になっており、外遊の記述は少ない。典型的なフレーベル主義の実践であったといえる。

これが1906（明治39）年をはさんで1907（明治40）年度には、一転して外遊中心の実践になっている。4月初より近隣の海岸、農学校、人丸山麓、園芸場等への遠足を頻繁に行ったことがみてとれる。梅雨の時期に入ってからそれができなくなると保姆は「いたづらに狭き園舎に籠城せざるをべからざるか」（6月11日）と嘆じている。「第二時」「第三時」等の記述が含まれることから、時間表を意識した保育になっていることがわかるが、それに拘泥した様子はいかがわれない。幼児の自発的な遊戯を重視した内容であり、ほぼ毎日、会集の会話から始め、全身的な活動を伴う唱歌か遊戯を展開していたものと推察される。一方で手技は軽視され、この時期は恩物を扱わなかった可能性さえある。

1908（明治41）年度は不明であるが、1909（明治42）年度になると、次の記事にみるように遊戯、談話等の内容を基本に園舎内外の活動を組み入れ手技も復活させて、以前よりは時間表を意識しながら多様な活動を展開するようになっていくことがわかる。

「会集は立野主任なしぬ 第二時に一の組は談話をなしぬ 二の組も談話をなし引続いて外遊をなす 第三時に一の組のみ遊戯をなしぬ 二の組は外遊より変えるや否昼食となしぬ 午後一の組は積木を二の組は粘土にて石碑を作り嬉しげに帰りぬ」（5月18日）

【表2】明石女子師範学校附属幼稚園所蔵史料① [日誌史料：1904（明治37）年～1917（大正6）年]

年 度	表 題	記入期間	表 題	記入期間	表 題	記入期間
1904（明治37）					明治三十七年度 保育日誌	10.1～2.16
1905（明治38）					明治三十八年度 保育日誌	4.1～7.7
1906（明治39）					—	
1907（明治40）					明治三十九年 保育日誌	前半 4.1～10.4 後半 4.1～12.2
					—	
1908（明治41）					明治四十二年度 保育日誌	4.1～3.23
1909（明治42）	—		—			
1910（明治43）	—		—		—	
1911（明治44）	明治四十四學年度幼稚園 日誌	4.1～3.25	—		明治四十四年度 保育日誌 二ノ組	4.1～3.23
1912（明治45）	明治四十五年度 幼稚園 日誌	4.1～3.25	明治四十五年度 會集日誌	4.1～3.24	—	
1913（大正 2）	大正式年度 幼稚園日誌	4.1～3.25	大正式年度 會集日誌	4.1～3.17	—	
1914（大正 3）	大正三年度 幼稚園日誌	4.1～3.25	—		大正三年度 保育日誌一ノ組	4.6～3.25
1915（大正 4）	—		大正四年度 會集日誌	第一学期第二 週～第三学期 第十二週	—	
1916（大正 5）	大正五年度 幼稚園日誌	4.1～3.24	—		—	
1917（大正 6）	大正六年度 幼稚園日誌	4.2～3.25	—		大正六年度 保育日誌二ノ組	4.4～3.23

この年度の会集は、当初は遊戯室において二つの組が共同で、5月21日以後は別々に実施している。会集を第一時とし、第二時以降は二つの組のそれぞれが各項目の内容をふまえて保育を進めている。

この時期の特徴としてあげられるのは、同園のカリキュラムが基本的には1899（明治32）年の幼稚園保育及設備規程とそれに続く1900（明治33）年改正の小学校令施行規則に規定された保育4項目に依拠したものであったということである。同園は附属小学校の傍らにあり同校教員と職員会、諸行事のみならず研修、教生の指導等を共同で行っていたが<sup>11)</sup>、カリキュラムについてはやはり小学校と異なる幼稚園ならではのものであったことが確かめられる。

もう一つには、1907（明治40）年度に手技中心の園舎内の活動から戸外活動重視の方向へ大きく転回し、保育4項目以外に外遊を組み込むようになったことがあげられる。後の主事及川はこの年の10月7日に自らの新任式に出席しているが、この時すでに同園では、地理上の利点をいかし旅行や園芸活動、戸外での遊戯に積極的に取り組んでいたことになる。これは同年度まで本校にいた藤堂忠次郎校長によって称揚された、明石女子師範独自の教育方針を背景にしていたというべきだろう。藤堂は生徒の「活知識」の習得のために校外教授を月一回ないし二回実施するほか、郷土研究や物価状況調査を奨励するなど<sup>12)</sup>、戸外における活動を通じた心身両面の鍛錬を重んじ成果をあげ、信望を集めた。この方針を受け附属小学校にでも校外教授や遠足が幼稚園の幼児を伴って頻繁に行われている<sup>13)</sup>。園の実践の転換点となった1907（明治40）年度における保姆の松尾は同師範本科の一回生、威徳寺は同二回生であり、それまで在籍した三人の保姆とは異なって同師範出身の訓導兼保姆であった。フレーベル主義の内容に拘泥することなく、自らの経験から得た信念を実践に直裁に反映させた結果、同園独自のカリキュラムが生まれた可能性がある。

及川はこの戸外活動重視の方針に共鳴しながら、自ら調査した「教育の新潮」の正当性にも自信を深め、恩物批判を開始したとみられる。彼は1908（明治41）年度の段階で次のように記している<sup>14)</sup>。

「…我が附属幼稚園では教育の新潮に基き保育科目を会合<sup>ママ</sup>、旅行、園芸、戸外ゲーム、戸内遊戯（談話手技唱歌等）とした（。＝引用者）小さな恩物を指先に弄ぶことを主たる保育事項とする様な従来の保育はよろしくない（。＝引用者）子供が全力を挙げて活動し大に自然と接触し何事も自己の直接経験で会得する様導くべきである（。＝引用者、以下略）」

ここに記された保育科目の構成を同年度の史料から直接確かめることはできないが、こうして少なくとも1909（明治42）年度までに同園のカリキュラムは、戸外活動重視の方針を「保育方針並ニ幼稚園内規」の中に掲げ得るまでのものになっていたと考えられるのである。

### 2.3 日誌記録の整備と再編成

ここで当時における日誌史料の位置づけや取扱いの方法についてふれておこう。附属小学校の「明治四十一年度主事日誌」には3月31日付で新学年に向けた準備事務に関する記述がみられるが、それによると翌1909（明治42）年度、同幼稚園では「保育課目録」「保育日誌」をそれぞれ50ページで一冊ずつ調製し記入することになっていた。「保育課目」は現物が見当たらず、どのような内容であったか不明である。同園ではこの「保育課目」が書かれなかったかあるいは失われたかして、上記の「保育日誌」だけが残存しているとみられる。

及川は赴任後、1908（明治41）年度から校園の組織改革とともに書類・物品の整備も進めた。しかし上述のように及川が定期的に検印しながら記載者や書き方が必ずしも一定していない様子からうかがわれるように、同園の「保育日誌」の位置づけや取扱いについては、翌1909（明治42）年度においてもなお曖昧なままであったと推察される。

それが1911（明治44）年度以降、同園の記録は【表2】にみるように「幼稚園日誌」「会集日誌」「保育日誌」の三本立てで整備される。「幼稚園日誌」は小学校の「学校日誌」にあたるもので、保姆や幼児の出席状況、行事、職員会や保母会、母の会といった会議や式典、教生や参観人等に関する生活記録である。また「会集日誌」「保育日誌」は保育記録である。同園ではこの頃、上記のように朝は会集から始めこれを第一時とし、第二時以降は保育項目ごとの内容に移行する形がすでにできていたが、この一日の保育の流れを反映させた二種類の日誌を設け、「会集日誌」は共同で、「保育日誌」は各組で記すことにした。これらと「幼稚園日誌」と合わせ、全部で三種類の日誌による記録を試みたと考えられるのである。

ただし保姆は二人だけであり、三種類とも記すのは困難であったと思われる。一つの年度で二種類の記録だけ現存するケースが多いが、これについては後に欠落したか当初から書かれなかったかの双方の可能性を考える必要があるだろう<sup>15)</sup>。

同園には以上の日誌史料以外の史料も所蔵されている。【表3】にその一覧を示す。



【表 3】明石女子師範学校附属幼稚園所蔵史料②〔日誌以外の史料：1904（明治37）年～1917（大正6）年〕

年 度	表 題			
1904（明治37）			明治三十七年度 幼児台帳	明治三十七年度 幼児出席簿
1905（明治38）	明治三拾九年 母ノ會	明治三拾九年 老人會	明治三十八年度 幼児台帳	明治三十八年度 幼児出席簿
1906（明治39）			明治三十九年度 幼児台帳	明治三十九年度 幼児出席簿
1907（明治40）			明治四十年度 幼児台帳	明治四十年度 幼児出席簿
1908（明治41）			明治四十一年度 幼児台帳	明治四十一年度 幼児出席簿
1909（明治42）				明治四十二年度 幼児出席簿
1910（明治43）	保育方針並ニ幼稚園内規		明治四十三年起 保母會議録	明治四十三年度 幼児出席簿
1911（明治44）	明治四十四年度 手技要項 附属幼稚園一ノ組	明治四十四年度 手技要項 附属幼稚園二ノ組	明治四十三年起 保母會議録	明治四十四年度 幼児出席簿
1912（明治45）	大正二年二月 講話要項			
1913（大正2）				
1914（大正3）				
1915（大正4）				
1916（大正5）			大正五年四月 通信簿	
1917（大正6）	大正六年二學期 教生所感 及觀察録			

### 3 「保育方針並ニ幼稚園内規」にみる幼稚園カリキュラム

#### 3.1. 「保育方針並ニ幼稚園内規」の作成年と執筆者

以上をふまえ、同園の主要史料である「保育方針並ニ幼稚園内規」の検討に移ることにする。

まず明治期における諸史料の内容から、「保育方針並ニ幼稚園内規」の作成年を絞り込むことができる。上述のように、「明治四十一年度主事日誌」から1909（明治42）年度まで同園では保育日誌のみ調製し記されていたことがわかるが、「保育方針並ニ幼稚園内規」には「週番保母事務」の項目中、週番の役割の一つとして「9. 毎日会集日誌幼稚園日誌ヲ記入スルコト」と記されている。これは「保育方針並ニ幼稚園内規」のこの部分が少なくとも1910（明治43）年度以降に書かれたことを示すものである。また「教生指導方案」の項目中、「本科二部生及ビ乙種講習生ハ保育来観ノミニ止ム」とあるが、明石女子師範に乙種講習科が開設されるのは1904（明治41）年度以降、本科二部は1906（明治43）年度でかつこの年度限りの募集であり、当時二つのコースが並立したのは同年度だけ<sup>16)</sup>であることから、それが確かめられる。

加えて「明治四十三年起保母會議録」の1911（明治44）年4月12日の記事「一、本學期ニ於テナスベキ仕事ニツキテ」において「6 幼稚園規定修正」とあり、また「明治四十四学年度幼稚園日誌」の記載から6月9日、16日、23日、30日の保母会で保育方針の「修正」「補綴」がなされたことが知られる。さらに「明治四十三年起保母會議録」の1911（明治44）年5月19日に「教生保育実習中ニ於ケル注意要項」の「1. 子供ノ取扱ニ就キテ」と「2. 一般注意」が、また同年6月23日には「教生成績考査標準」がそれぞれ記され、これらの内容が「保育方針並ニ幼稚園内規」の上記「教生指導方案」中にはほぼ同文で見出される。つまり1911（明治44）年度に入ってから、同書の冒頭部分の修正や内規の最後の部分の追加の是非が、保母らによって検討され続けていたことになる<sup>17)</sup>。

「明治四十三年起保母會議録」には上記「一、本學期ニ於テナスベキ仕事ニツキテ」において「10 幼稚園歌」とも記され、「明治四十四学年度幼稚園日誌」の同年10月4日には「園歌につき決議」の記事がある。「保育方針並ニ幼稚園内規」で園歌は末尾に添えられている。同規程の目次には各項目に番号が付してあるが、本文にはそれがない。各項目の記載を追加しながら最終的に現在のものに集成されたとみてよいであろう。これらのことから、現存する「保育方針並ニ幼稚園内規」がいつ作成し始められたかについては確定できないにせよ、同規程の一部は1910（明治43）年度内から明文化されており、修正や補足を加えられながら、翌1911（明治44）年度半ば頃までに作成されたものであることが判明する。「保育方針並ニ幼稚園内規」は園の創設当時ではなく、6年から7年ほどのタイムラグを経て制定されたのである。

また、執筆者については保母の今井と判断される。今井は師範本科3回生で1907（明治41）年度に同園へ赴任し1914（大正3）年度まで在籍したが、この期間に書かれた「明治四十二年度保育日誌」「明治四十三年起保母會議録」「明治四十四学年度幼稚園日誌」「明治四十四年度手技要項」「明治四十四年度保育日誌」「明治四十五年度會集日誌」の表紙や記述の一部と今井印のある「大正二年二月講話要項」の筆跡が、「保育方針並ニ幼稚園内規」のそれと明らかに同一だからである。主事及川の指導のもとで、保母二人のうち1909（明治42）年度から主任保母となっていた今井<sup>18)</sup>が、園の基本文書である「保育方針並ニ幼稚園内規」を記述したとみるのが妥当である。

### 3.2 「保育方針並ニ幼稚園内規」制定までの経緯

では、この「保育方針並ニ幼稚園内規」はどのようにして作成されるに至ったのだろうか。すでに橋本が指摘しているように<sup>19)</sup>、「明治四十一年主事日誌」の6月29日付で及川は以下のように記している。

「一 従来幼稚園保育ハ一週間保育事項ヲ予定シテ実行シ来タリシモ保育細目ナク保育要項ノ確定シタルモノナキヲ以テ保姆ノ其ノ日其ノ日ノ考ニ任セテ保育スル傾アリ依テ先ツ保育方針ヲ確定スルタメ当分一週一回保育研究会ヲ開クコト、セリ

(イ) 主事会長トナリ威徳寺松尾今井ノ三訓導ヲ会員トスルコト

(ロ) 八月末マデニ保育要項ヲ編纂スルコト

(ハ) 幼稚園概覧ヲ編纂シテ幼稚園全部ノ状況ヲ明ラカニスルコト

(ニ) 保育事項、家庭トノ連絡等ニ改良ヲ加フルコト」

ここに言う保育事項とは会話、唱歌、遊戯のことであろう。上述のように1907（明治40）年度における松尾らの実践は少なくとも年度当初は外遊中心で、会集の会話から始め、次に全身的な活動を伴う唱歌か遊戯を展開する流れで行われていたと推察されるが、ここではそれが「其ノ日其ノ日ノ考ニ任セテ保育スル傾アリ」と問題視されている。

これらの指示は附属小学校における組織改革を背景にしたものと考えられる。1907（明治40）年4月17日に師範学校規程が発令されたが、同年9月に着任した小学校主事及川はこれを受け1908（明治41）年度から尋常一年の二部教授を開始した。また同校訓導に教授案の目的の記載方法について教科別に検討を進めさせ、また訓育・養護の研究を行い校訓を定めさせるなどして組織整備をはかった<sup>20)</sup>。師範学校規程では「女生徒ヲ置キタル師範学校ハ成ルヘク附属幼稚園ヲ設ケヘシ」（第74条）とされ、附属幼稚園は附属小学校と並べて規定されている。及川は小学校主事ではあったが、附属幼稚園の実践を目の当たりにし<sup>21)</sup>、保姆も併せて指導を加え、保育方針・要項を体系的に整備させる必要性を認めたとみられる。

しかしその作業は難航したであろう。この年度、同園は前年度に引き続き松尾を欠き、威徳寺は附属小学校尋常4年の学級担任に配置換えとなったため、新卒で配属された今井が単独で二つの組の保育を担当せざるを得なかった<sup>22)</sup>。当時、頻繁に行われた天幕子守教育<sup>23)</sup>の負担も少なくなかったと推察される。同年度の保育日誌は見当たらず、概覧も現存しない。また上記の指示において「当分一週一回」とされたはずの保育研究会開催の記述が主事日誌にあらわれるのは、翌年1月16日が最初である。6月29日以後、保育方針・要項の体系的整備と概覧の執筆を行う余裕は、少なくとも松尾の後任の山本が10月から保育を担当して通常の状態に復すまで、しばらく見出し難かったものと考えられるのである。

翌1909（明治42）年度、附属小学校は「為さしむる主義の教育、実験室制度、分団式教育」の三綱領を立て、それまでの教授・訓育・養護全般の研究に基づき「明石女子師範学校附属小学校教育方針」<sup>24)</sup>（以下、「小学校教育方針」と略記）を制定した。このように小学校の方の組織改革・教育改革は順調に進展していたのであるが、その傍らの幼稚園で書かれた「明治四十二年度保育日誌」に、保育方針・要項に関する記事は見出されない。ただし「明治四十二年度学校日誌」には10月22日に校園の職員会で「幼児教育ノ事項ニツイテ」と題して今井が、また10月15日に「幼児ノ道徳ト習慣」、1月21日に「童話ニツイテ」と題して安保がそれぞれ一般講話を行った記事がみられ<sup>25)</sup>、この時期、保姆たちに対して保育方針の検討や内容に関する研究が要請されていたことが確かめられる。上述のようにこの年度になると、園の実践も一定の保育時間を念頭に多様な内容で展開されていた。かつての「其ノ日其ノ日ノ考ニ任セテ保育スル傾」は克服されていたとみてよいだろう。天幕子守教育が幼稚園専属の事業となり負担が増した可能性はあるものの、同年度からは今井らのもとで園の研究・実践を文書のうえでも整備する条件が整いつつあったものと推察される。

このような経緯を経て1910（明治43）年度以降、漸く「保育方針並ニ幼稚園内規」が書かれたのである。したがって同規程の内容は、附属小学校の教育方針や及川の指導との関係を念頭において読み直されなくてはならない。若き今井は「小学校教育方針」とどう向き合い、及川のもとで懸案であった保育方針・要項の体系的な整備という課題にどのように取り組んだのであろうか。以下、この視点から同規程の内容をみていくことにする。

### 3.3 「保育方針並ニ幼稚園内規」の内容の概要

「保育方針並ニ幼稚園内規」の内容は、概ね①「附属幼稚園規定」、②「保育ノ方針」「幼稚園生活」、③「当園保姆座右ノ銘」以下の諸内規・心得等、④幼稚園歌の4つに分類される。

①は園全体の規定である。全15条からなり、同園の目的、入園時期、就園期間、定員、学級編制、入退園の手続き、保育時間、保育料、休業日、季節による保育時間の変動、保育証書、諸届、疾病による入園停止を定めている。

②はカリキュラムの大綱的規定であり、後述する。

③は①②の下位に属する保姆や保護者、教生に関する内規・心得等であり、その項目は「当園保姆座右ノ銘」「幼稚園家庭連絡内規」「家庭ノ心得」「週番保姆事務」「教生指導方案」である。これに④幼稚園歌が添えられている。このうち「幼稚園家庭連絡内規」「家庭ノ心得」は、上述の及川の指示にある「家庭トノ連絡等ニ改良ヲ加フルコト」に対応している。

以上のうち②の「保育ノ方針」「幼稚園生活」の内容が重要である。この部分はカリキュラムの大綱的規定に該当し「小学校教育方針」に対応するものだからである。それぞれの内容について詳しくみていこう。

「保育の方針」の項目は、次のようになっている。

- (1) 幼児ヲシテ健全ナル身体ノ発達ヲ遂ゲシムルコト
- (2) 幼児ノ心情ヲ涵養シ善良ナル習慣ヲ得シムルコト
- (3) 以上ノ二目的ヲ充分ニ達セシメ心身ノ完全ナル発達ヲ計リ以テ家庭教育ヲ補イ併セテ完全ナル学校教育ヲ受クルニ適当ナラシメントス

「小学校教育方針」では知育・徳育・体育の三領域にわたり学習・修養・鍛錬の原則、内容、機会、方法等が示されているが、ここでは体育・徳育の二領域を特に重視して項目化している。ただしこれらの項目は「小学校教育方針」のそれを反映したものではなく、別の文書を参照して記されている。それは、1900（明治33）年改正の小学校施行規則に基づき1906（明治39）年に制定された「女子高等師範学校附属幼稚園保育要項」<sup>26)</sup>（以下、「女高師保育要項」と略記）である。(1) (2)は同書「第二 保育の方針」中最初の二つの項目であり、(3)はそれらの後に来る文章をもとにしたものである。

これらの項目の内容を説明した文章の方は、「女高師保育要項」の趣旨や文章を部分的に用いながらも独自に記されている。(1)では「幼児期ニ於テハ心身ノ発達ハ精神ノ発達ニ比シテ非常ニ盛ニシテコノ時期ノ活動ハ専ラ身体方面ニアリ」とし、以下「1.外遊園ヲ多ク利用シ遊戯セシムルコト」「2.旅行ヲ重ンズベキコト」「3.園芸」「4.体格検査」の節ごとに説明しているが、それらの内容はいずれも「女高師保育要項」や「小学校教育方針」にはみられない。また(2)では「幼稚園時代ノ幼児ニアリテハ智力ニ比シテ感情ノ活動盛ナルガ故ニ感情ノ教育ハ亦極メテ必要ナル部分ヲ占ムルニ至ル」等とあり、かなり独自に書かれたとみられる記述が続いている。ただし最後の「…幼児保育ニ於テハ大ニ作業ノ機会ヲ拡張シ作業ニヨリテ特ニ正確、清潔、従順、正直、親切、友愛、忠孝、忍耐等ノ如キ道德的品性確立ノ素地ヲ作ラシムコト、最も肝要ナリ」とある部分については、「作業ノ機会ヲ拡張」の箇所は「小学校教育方針」における「為さしむる主義徳育に於ては大に徳育を施すべき機会を拡張することを要す＝機会拡張の徳育」を幼稚園の作業に即して記したもの<sup>27)</sup>、また「清潔」以下の徳目は「小学校教育方針」に示された校訓である「勤勉」「親切」「従順」を基調に、教育勅語の内容を幼児向けに整理したものと解される。そして「道德的品性確立ノ素地ヲ作ラシム」の箇所は「女高師保育要項」から援用したものである。

次の「幼稚園生活」の項目は、「甲 保育事項」と「乙 生活ニ由ル保育」に二分されている。これは「小学校教育方針」において知育・徳育・体育は教科教育のみならず生活を通してなされるとし、徳育の機会を「教科による徳育」「生活に由る徳育」に二分したことを受けたものであろう。冒頭「児童ノ本能衝動ヲ規定善導シ以テ實際ノ事例ニヨリテ自然ニ善良行為ニ誘起セントス」は、「幼児」でなく「児童」となっているが、「小学校教育方針」総説の「三、衝動は教育の手掛なり、衝動を規制善導して理想に導くは即ち教育なり」を念頭に置いての記述と考えられる。ただしこの文章では「女高師保育要項」における「第三 保育ノ方法」中の文章「實際ノ事例ニヨリテ自然ニ善良ノ行為ニ誘致センコトヲ期ス」からも併せ記している。

第一の「甲 保育事項」は、「1. 保育事項ノ区分」「2. 保育事項ノ要旨」「3. 保育事項ノ選択」の3節からなる。この設定は、「女高師保育要項」の「第四 保育事項」において遊戯、唱歌、談話、手技の各事項の要旨、選択の標準、注意事項が記されているのを参照してなされたものとみてよい。

「1. 保育事項ノ区分」については、遊戯、唱歌、談話、手技の前に会集、園芸、旅行を、後に観察、整理を記し、番外で「日常生活演習」を小書している。

「2. 保育事項ノ要旨」については、会集、園芸、旅行の各文章は独自に記したとみられるが、それ以外の4項目の要旨は「女高師保育要項」のそれをほぼ同文で写している<sup>28)</sup>。手技については次のような相違がみられる。

- ・「手技ハ手及眼ヲ練習シ工夫想像ノカト美的心情トヲ養ヒ心意発達ニ資スルヲ以テ要旨トス」（「女高師保育要項」）
- ・「手技ハ幼児ノ作成的活動ヲ満足セシメ併セテ手及眼ヲ練習シ工夫想像カト美的心情トヲ養ヒ幼児ノ発達ニ資スルヲ以テ要旨トス」（「保育方針並幼稚園内規」，傍線＝筆者）

そして要旨の記述の前に「結果ノ成功ノ満足ヨリ自敬力を得」「結果ノ満足ヲ考ヘ持続敢行力ヲ養フ」と小書している。これらの手技に関する記述内容については後述しよう。観察、整理の要旨についての記述はない。なお「女高師保育要項」では遊戯、唱歌、談話、手技の順であるが、「保育方針並幼稚園内規」では遊戯、談話、手技、唱歌の



順で記している。

「3. 保育事項ノ選択」については、遊戯、唱歌、談話、手技の前に園芸、旅行を、後に会集を記している。園芸、旅行と会集以外の4項目の選択については、やはり「女高師保育要項」のそれを参照しながら記している。ただし文章の一部を抜き書きし再構成して覚え書きの体裁にしたもので、遊戯5項、談話7項、手技2項、唱歌7項ずつの箇条書きである。手技については次のような記述となっており、前半は「女高師保育要項」の文章、後半は独自のものである。

「手技ハ専ラ幼児ノ自然ニ適応シ興味ヲ惹起スルニ適セルモノ

製作ハ幼児ノ作成的活動ニ適シ幼児ノ興味ニ適セルモノ」

そして「製作の種類」として「繋ぎ方」「豆細工」「粘土細工」「紙細工 摺紙、織紙、貼紙」「縫取」があげられている。

第二の「乙 生活ニ由ル保育」は、前半において「1. 服装」「2. 食事」をめぐる心得が10項にわたり列挙され、後半において「保育の測定効果」が「1. 身体検査」「2. 個性検査」のそれぞれについて要領、方法、利用法が記されている。前半は具体的な心得であり日常の保育に基づき記したもの、後半は従来から実施してきた検査の要領を文章化したものであろう。また「附 個性観察簿記入標準」で身体、動作、性質、言語、好み、習癖についての観察の視点が箇条書きされているが、これはどのような文脈で記されたものか不明である。最後に「幼児躰方につきて」として躰のポイントが29項あげられている。「1. 服装」「2. 食事」をめぐる記載と同様、日常の保育に基づく記述であると推察される。

以上のように「保育方針並ニ幼稚園内規」にみるカリキュラムの大綱は、「小学校教育方針」を参照しつつも「女高師保育要項」を下敷きとして、それまでの同園の保育方針と内容を整理し文章化したものであった。以下、同規程制定後の幼稚園カリキュラムがどのようなものになっているかについて確かめよう。そのうえで、同規程とこの時期の幼稚園カリキュラムに与えられた意味について幼小の関係を念頭に考察することにする。

## 4 「保育方針並ニ幼稚園内規」制定後の幼稚園カリキュラム

### 4.1 日誌史料[1911(明治44)年～1912(明治45)年]の概要

残る保育記録である1911(明治44)年度の保育日誌ならびに1912(明治45)年度の会集日誌の執筆者と体裁を記す。

「明治四十四年度保育日誌 ニノ組」主として二ノ組の担任保姆であった前田による記述である。11月18日から22日は前田が欠勤したため今井が記している。幼児の様子が共感的に記され、新任保姆の悲喜交々の思いを表現したものになっている。「第一時集」等と付記した時間毎の記述が比較的多く含まれるが、それぞれの開始・終了時刻はわからない。各日において会集、遊戯、唱歌、談話、手技、旅行、園芸等の内容がどのように扱われたのかについて記されている。

「明治四十五年度會集日誌」今井と井田が交替で記述している。「保育方針並ニ幼稚園内規」では「会集ハ全保姆幼児一室ニ会シテ道德的教訓ヲ施シ兼テ幼児相互ノ友情ヲ温メ且終日和楽スルノ念ヲ充分喚起セシムルヲ以テ要旨トス」と規定され、二つの組が別々に実施してきたのが原則的に共同開催となった。保育日誌と同様の形式で日付、曜日、天候を記した後、毎日の会集の内容が記されている。ただし文章による記述ではなく、「会話」「遊唱」の2項目を併記し、それぞれで扱った会話の内容と歌の名称等を箇条書きしたものになっている。

### 4.2 1911(明治44)年～1912(明治45)年におけるカリキュラムの内容と特徴

会集日誌と保育日誌の記録には一年のずれがある。それを含んで考えなくてはならないが、二種類の記録を併せみることによって、当時の同園における一日の保育の流れがかなり明らかになる。

まず会集であるが、最初の「会話」では生活上注意すべき事柄についての話や物語、日常に取材した話や道徳的な話など、保姆の側から多様な話が語られる<sup>29)</sup>。続いて「遊唱」に入る。「遊唱」とは合同で行う唱歌と行進である。一回の会集につき二、三曲を歌い行進した後、遊戯室からそれぞれの保育室に帰還する。

次の第二時以降は、二つの組のそれぞれが園芸、旅行、遊戯、唱歌、談話、手技の活動に入る。1911(明治44)年度の二ノ組においては当初、少なくとも第二時は時間表があったことが想定される。しかしその後、実際には水曜の旅行を除きその通りには実施せず、6項目の内容のいずれかが随時に扱われている。旅行は第二時から第三時まで継続して行い昼に園に帰還する場合もみられる。各曜日とも第二、三、四については一時間ごとに内容を変え、各項目の内容が満遍なく扱われるようにする一方、冬季の晴天日には予定を変更し自由遊びをさせる<sup>30)</sup>など、幼児の状況



に合わせ予定を柔軟に変更しながら保育を行った様子がうかがわれる。

なお、「保育方針並ニ幼稚園内規」では当園時刻が4月15日から8時、6月1日から8時半と規定されているが、概ねこの期間においては旅行が頻繁に実施され、9時となる9月20日以降は少なくなっている。また「明治四十四年度手技要項」の作成のためであろうか、二学期以降は第四時に手技をあてる日が比較的多くなっている。

「保育方針並ニ幼稚園内規」制定後の同園におけるカリキュラムの特徴として第一にあげられるのは、やはり戸外活動が重視されていることである。1911（明治44）年度の一学期において、旅行と園芸は確認できるだけでも14回にわたり実施されている。従来からの方針が実践のうえでも堅持されていることがわかる。

第二の特徴は会集をめぐる取組みがみられることである。「明治四十三年起保母会議録」の1911（明治44）年4月12日の記事に新学期の仕事として「4 会集ニ関スル研究」があげられ、また「保育方針並ニ幼稚園内規」には「保育事項ノ選択」の7項目中最後に会集があり、「会集ニ関シテハ保育要項参照スヘシ」という文章が見出される。これは同規程の下位に位置するカリキュラム規程として、保育全般に関する要項か会集要項が想定ないし作成されていたことを示すものである。現存する要項は「明治四十四年度手技要項」だけでその内容を具体的に証すものはないが、少なくともこの年度に「会集ニ関スル研究」を通して要項の策定がめざされたのは間違いない。「明治四十二年度會集日誌」の内容と「明治四十五年度會集日誌」のそれを比較して異なるのは、二つの組の共同開催となったことと、会集全体を「会話」「遊唱」の二項目で構成するようにしたことである。ここにみる限り、今井らによる研究の後、会集は一日の保育を開始するにあたって園全体の談話、遊戯、唱歌の導入部として位置づけられたと考えられる。「会話」において「道徳的教訓ヲ施シ」、遊戯と唱歌を合体した「遊唱」<sup>31)</sup>において「幼児相互ノ友情ヲ温メ」「終日和楽スルノ念ヲ充分喚起セシムル」とともに、幼児の状況に合わせて第二時以降への接続と柔軟な内容編成を容易にすることをねらったことが推察されるのであり、ここに同園独自の工夫をみてとることができる。

問題は残る手技の扱いである。この手技をどうとらえ実践したかをみることによって、及川や「小学校教育方針」に対する当時の今井のスタンスを理解することができる。

#### 4.3 「保育方針並ニ幼稚園内規」にみる手技の扱いと幼稚園カリキュラム

手技については、上述のように「保育方針並ニ幼稚園内規」の「2. 保育事項ノ要旨」として「幼児ノ作成的活動ヲ満足セシメ」ることがあげられている。また「3. 保育事項ノ選択」でも手技に「製作」を対峙させる形の記述となっており、その要件として「幼児ノ作成的活動ニ適シ」たものであることが求められている。

幼児の「作成的活動」という語は「女高師保育要項」と「小学校教育方針」のいずれにもなく、及川が紹介した「構成的作業」の語を言い換えて記されたと考えられる。及川は1910（明治43）年5月22日、第17回京阪神聯合保育会の研究会合において「現時の幼稚園のやり方は余りにフレーベルに囚へられすぎでは居はしないか」<sup>32)</sup>と論じ、また6月19日、神戸市保育会兵庫部会において「幼稚園の作業」について演説している<sup>33)</sup>。『京阪神聯合保育会雑誌』の同年7月号に掲載されたこの演説の筆記録の内容は、橋本によればアメリカの幼稚園運動の指導者として活躍していたテンブルの論考「幼稚園の作業」<sup>34)</sup>の翻訳である。同論考ではフレーベルの恩物と作業をめぐって、①プログラムの題材と素材使用の関係、②数的・幾何学的認識を目的とする使用、③発明への機会と誘因、④表現様式の心理学上の妥当性の4つの視点から保守派の実践に対する進歩派の見解が示され、その正当性が主張されているが、このうち②についての文章の中で幼児のconstructive occupation, constructive workの語があらわれ、抄訳にあたる筆記録で「構成作業」「構成的作業」と記されている。

合衆国において手工教育に発したoccupationの語は初等教育でも用いられ、デューイら進歩主義者によって幼児・児童の本能・衝動に基づく自発的、協同的な製作活動を意味するものとして再解釈されていた<sup>35)</sup>。テンブルの論考にもその解釈がみられる。幼児にとってconstructive occupationの目的と手段、結果と過程は不可分の関係にあり、またそれは遊戯を母体としながら仕事(work)にもなり得るものとしてとらえられている。そして最初は模倣に始まる場合でも、目的や意図を伴うことで幼児自身の想像に基づく創造や発明、自己表現の活動に転じ得るものとして特徴づけられている。及川か今井ら保母かいずれに発したか不明であるが、「作成的活動」はこの特徴をさらに積極的に表わそうとした語であろう。「保育方針並ニ幼稚園内規」では本文とは別に、手技の趣旨への小書「結果ノ成功ノ満足ヨリ自敬力を得」「結果ノ満足ヲ考ヘ持続敢行力ヲ養フ」や、「製作」に関して「模倣製作 写実的全 記憶的全 考案的（想像的）製作」「製作題目一幼児ノ好メテ製作セントスルモノ」（傍線＝原文）「自動ノ養生、自力ヲ以テ工夫発明セシムルコト」等の添え書きが加えられており、これらは書かれた時期を特定できないにせよ、「作成的活動」の理解を深めるために今井が記したものと考えられる<sup>36)</sup>。このように幼児の製作活動の意義について今井自身が及川から直接学び、あるいは示唆を与えられながら記したとみられる形跡を、「保育方針並ニ幼稚園内規」の中に見出しうるのである<sup>37)</sup>。

ただし手技の実践に対する及川の影響は限定的である。合衆国の幼稚園運動におけるconstructive occupation, constructive workは、幼児自身の自由な想像に応じて多様な素材を用いてなされるものとされ、恩物への依存から実践を解放する文脈で語られていたのであるが、今井らはあくまで個々の恩物を扱う方法として受けとめたようである。「保育方針並幼稚園内規」で「製作の種類」として記されているのは「繋ぎ方」「豆細工」「粘土細工」「紙細工」「摺紙、織紙、貼紙」「縫取」であり、「明治四十四年度保育日誌 二ノ組」にみられる手技の内容は「繋ぎ方」「豆細工」「粘土」「摺み紙」「貼り紙」「積木」「板ならべ」「画き方」である。また二冊の「明治四十四年度手技要項」には、一ノ組の方は「織紙」「積木」「画き方」「板ならべ」「貼り紙」の作品が、二ノ組の方は「積木」「板ならべ」「箸ならべ」「環ならべ」「画き方」「貼り紙」の作品がそれぞれ見出される<sup>38)</sup>。いずれにおいても、「女高師保育要項」や東基吉『幼稚園保育法』（1904（明治37）年）、中村五六『保育法』（1906（明治39）年）等にみられる従来の恩物が示されており、それ以外の素材は扱われていない。

「小学校教育方針」においては「為さしむる主義教育の本質」の一つとして「特に作業を尊重す、之に因て実用的道徳的美的身体的陶冶をなすこと」をあげ<sup>39)</sup>、「作業は人類の進歩発達せる径路を経験せしむる者<sup>マ</sup>也」「各教科目の教育はなるべく作業の形となし作業を尊重して取扱ふべし」等としている<sup>40)</sup>。つまり作業一つとっても、同校において及川の「為さしむる主義」の教育論はカリキュラム全体の改造と不可分の関係にあった。

しかし今井らは「為さしむる主義」の教育論の趣旨を汲みつつも、それを幼稚園カリキュラムの根本的検討に及ぼすには至っていない。会集をめぐる取組みは一日の生活の流れや幼児の活動を重視した改善のための試みであったとみられるものの、既存の談話、遊戯、唱歌の内容への接続を前提になされ<sup>41)</sup>、また手技においては当時の幼稚園のシンボルである恩物が使用され続けた。「保育方針並二幼稚園内規」制定後における同園の実践は、独自の試みを含みながらも、「小学校教育方針」を参照して同規程に示されたはずの作業の機会拡張の方針や、「兎に角恩物を改良しなければならぬ」<sup>42)</sup>とする及川の主張とは距離を保ちながら、基本的には従来の幼稚園カリキュラムの枠組みを堅持して行われていたのである。

## おわりに

今井が小学校カリキュラムや及川の指導と距離を置いたのは、幼小の制度的枠組みの懸隔によるだけでなく、明石の地理的条件によるところも大きかったであろう。京阪神地域への日帰りが可能な位置にあって、若き今井は書籍で情報を得るだけでなく、保育会合への参加や他園の見学を頻繁に行い、幼稚園教育の先進的動向をかなり察知していたとみられる。当時の幼稚園では恩物が用いられ続けたがすでに形式的な扱いは反省され始めており、「自由遊びを中心としたわが国の幼児保育のあり方が、関西では明治30年代の中頃から生じはじめていたと推察される」<sup>43)</sup>ほどの状況であった。そうした状況で日常的に幼児と交わり幼稚園教育を担う立場にあった今井には、「小学校教育方針」の内容を直接に受け止め準備的な内容を含めるよりも、遊戯を重視した「女高師保育要項」の内容に依拠して綴る方が幼稚園本来の保育方針・要項に適うものになると思われたのであろう。また同園では旅行、園芸等で戸外活動の機会が保障されていたから、園舎内で恩物を扱うことが幼児の自発的、創造的な製作活動を保障するものとしてかえって重視され、その使用の是非をめぐる問題意識が生じにくかったことも考えられる。つまり小学校主事の及川の期待を上回るほどに、今井にとって幼児の姿と当時の幼稚園像が意味をもっていたといえるのである。さらに、上司であった及川の「為さしむる主義」の教育論は保育に通じる方針を含んでいたが、この頃彼が精力的に研究を進めていた分団式教育は明らかに保育には馴染まなかった。幼稚園カリキュラムの運営にあたり今井らの裁量が比較的保たれた結果、既存の枠組みの中での実践が継続されることになったともいえよう。

その及川が次に着目したのは、モンテッソーリであった。1912（明治45）年4月13日、及川は京阪神地域におけるモンテッソーリ研究の契機となった倉橋惣三の講演「幼児保育の新目標」が神戸で行われる6月2日に先立ち、すでに今井らを相手に「モンテッソーリとフ氏との比較論」を講じている<sup>44)</sup>。その教育法は「自動教育（auto-education）」を標榜するばかりでなく自由の原理に基づく個別学習によるものであり、かつ幼稚園の意義が問われ就学後の成績が注目されていた当時、障害児教育をルーツとした教具体系を有し就学前教育のさらなる実効性を期待させるものであった。そしてそれは幼小を貫くカリキュラム開発の可能性も備えていた。及川と今井らは神戸に通いながら熱心に研究を進めたが、最終的にこの教育法をめぐる今井らの対応は冷静なものに終わっている。その経緯を明らかにすることを次稿の課題としたい。

## 注

- 1) 橋本美保「明石女子師範学校附属幼稚園における保育カリキュラムの開発過程ーアメリカ進歩主義の幼小連携カリキュラムの影響を中心にー」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第60集, 2009, pp.39-51.
- 2) 小学校史料と併せ整理した以下の報告があり, 筆者も調査の際この報告に多くを負っている。浜口隆・鈴木正幸「『明石附属校園所蔵教育史資料』(その一 戦前編)ー及川平治関係資料を中心としてー」(『神戸大学教育学部研究集録』第66集, 1981, pp.159-170), 同「『明石附属校園所蔵教育史資料』(その二 戦後編)」(同第67集, 1981, pp.149-168).
- 3) 久保いと「及川平治の幼稚園保育(一)」『幼児の教育』第69巻第1号, 1970, pp.64-44, 「及川平治の幼稚園保育(二)」同第69巻第2号, 1970, pp.37-44, 「及川平治の幼稚園保育(三)」同第69巻第3号, 1970, pp.48-55, 「及川平治ーデューイ的発想の教育理論構築ー」(岡田正章・宍戸健夫・水野浩志編『保育に生きた人々』風媒社, 1971, 133-165).
- 4) 志村廣明「大正・昭和初期新教育運動の研究(3)ー兵庫県明石女子師範学校附属幼稚園における及川平治の保育理論および実践についてー」『名古屋大学教育学部紀要ー教育学科ー』第26巻, 1979, pp.51-61.
- 5) 橋川喜美代『保育形態論の変遷』春風社, 2003, pp.437-464.
- 6) 史料名を除き, 引用した文章中の旧字は基本的に当用漢字としてある。
- 7) 兵庫県明石女子師範学校編『回顧三十年』(仲新・石川松太郎編集『日本教育史文献集成 第二部師範学校沿革史の部11』), 第一書房, 1983, 同校友会誌『心の玉』ならびに日誌史料の記述, 神戸大学教育学部附属幼稚園『80年の歩み』, 1984, pp.51-52を参照して作成した。なお主事伊賀は1906(明治39)年3月に転任, 同年12月まで欠員であったとされている。また及川は1907(明治40)年9月, 附属小学校主事に赴任し訓導だけでなく保姆や教生も指導したが, 幼稚園主事との兼任が当初からであったか1912(明治45)年以降か, 必ずしも明らかではない(及川平治「明石師範附属小学校幼稚園の沿革史」, 『心の玉』創立二十周年記念号, 1913(大正12)年6月, pp.39-40, 『回顧三十年』, pp.302-303)。表ではさしあたり1907(明治40)年10月から1911(明治44)年までの欄について及川の名を省いてある。
- 8) 同規程を最初に紹介したのは長玲子と村山貞雄であろう(日本保育学会『日本幼児保育史』第2巻, 1968, pp.210-212)。その後, これが創設の頃の作成とされ(文部省『幼稚園教育九十年史』, 1969, p.102, 国立教育研究所編『日本近代教育史第6巻 学校教育4』, 1974, p.1124, 文部省『幼稚園教育百年史』, 1979, p.153), 現在に至っている。この推定に対して橋本が疑問を示していた(橋本, 同上論文, pp.40-41)。
- 9) 同書に記載された幼児名と同年度の『幼児台帳』ならびに『幼児出席簿』との照合による。
- 10) この頃「日露戦争に際してゐたので保姆は多忙を極めた, 保育細目の作製に, 軍隊の送迎に, 祝賀に, 時々には神戸までも出かけてゐたらしい」とされている(兵庫県明石女子師範学校編, 同上書, p.301)。
- 11) 同校園では創設時から幼小教員同士あるいは教員と教生間で相互に指導場面の検討を実施していた。附属小学校の学校日誌には, 例えば1905(明治38)年5月12日に「批評教授 中澤保姆が第二組ニ教授ヲナシ午後批評会ヲ開ク」, 1906(明治39)年6月20日に「午後一時尋常第一学年国語ノ批評教授ヲ行フ 教授者高谷訓導」等の記事がみられる。
- 12) 兵庫県明石女子師範学校編, 同上書, p.11ff. 同校への及川招聘は藤堂によるものである。
- 13) 幼稚園は1905(明治38)年9月29日(舞子), 1906(明治39)年4月20日(舞子), 9月28日(須磨), 11月21日(不明), 3月5日(不明)等に校外教授や遠足を実施している(「明治三十八年度学校日誌」「明治三十九年度学校日誌」)。なお, 1909(明治42)年4月23日に幼稚園の幼児と尋常一二年の児童が園芸場に校外教授を行った際, 井田校長はその目的を「各学年相当セル春ノ自然ニ関スル理科的地理的知識ヲ授ケ自然ノ美妙ニ対スル崇高ナル感情ヲ感化セシメカネテ身体ヲ鍛鍊セシメントス」と記している(「明治四十二年度学校日誌」)。
- 14) 及川平治「欧米教育思潮 其の二」『心の玉』第9号, 1909(明治42)年3月, p.34.
- 15) なお, 小学校の「職員会議録」にあたるものに「保姆会議録」がある。現存するのは「明治四十三年四月起保姆会議録」のみで, 記事は1910(明治43)年5月3日から1911(明治44)年6月23日までの10回分だけである。これも記録上の負担が大きく, また「幼稚園日誌」の記載で足りたからであろう。以後, 戦前において同様の書類は見当たらない。
- 16) 明玉会母校創立百年記念事業実行委員会編『回顧百年』, 2003, p.15.
- 17) 同書には×印の書き込みが10カ所あり, 「本科二部生及ビ乙種講習生ハ保育来観ノミニ止ム」の項目にも付されている。
- 18) 及川平治「明石師範附属小学校幼稚園の沿革史」, p.40. 今井は兵庫県旧城崎町出身で明石女子師範本科の三回生であり, 同附属幼稚園を退職後, 1915(大正4)年, 母校の町立城崎尋常高等小学校(1926(大正15)年より学校組合立)に赴任し1936(昭和11)年まで訓導として勤務している(城崎小学校創立百周年記念事業委員会『城崎小学校百年史』1978, p.352)。
- 19) 橋本, 同上論文, p.41.
- 20) 一方, 同校では1907(明治40)年12月から「分団教育」を, また翌年度から一週二回各訓導による「分団教授」を行い, さらに6月からは主事自ら特別教室で個別教育を実施している(兵庫県明石女子師範学校編, 同上書, pp.238-239)。この頃の分団式教育の導入や「実験室制度」の理論的背景と及川の研究意図については, 橋本美保「及川平治による個別化教授プランの受容とその実践」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第57集, 2006, pp.31-32)を参照。
- 21) 当時, 主事室は幼稚園の園舎内にあり, 隣に職員室, 廊下越しに保育室が位置していた(神戸大学発達科学部附属明石校



- 園カリキュラム開発研究センター調査)。
- 22) 「幼稚園の方は長らく当園のために御尽力になりし松尾保母が、病氣休職せられし以降、今井保母が一人にて五十の幼児を育て、おられます。」(威徳寺たみゑ「附属小学校の近況」『心の玉』第9号, 1909(明治42)年3月, p.64)
  - 23) 天幕子守教育とは、就学奨励のため「附属校の訓導保母が町内各方面に出張して太鼓を打ち笛を吹いて子守を集め之を幼稚園に誘致して教育する」もので(及川平治「明石師範附属小学校幼稚園の沿革史」, p.39), 「毎週一回之ヲ行フコト」とされた(「明治四十一年度主事日誌」, 10月20日の記事)。翌年度に幼稚園専属の事業とした後、廃止されている。
  - 24) 『心の玉』第10号, 1910(明治43)年2月, pp.215-234.
  - 25) 1月28日にも今井が一般講話を行っている。ただし題名は不明である。
  - 26) 『日本之小学校教師』第8巻第91号, 1906(明治39)7月, pp.8-13, ならびに同第8巻第93号, 1906(明治39)9月, pp.19-22に掲載されている。文部省『幼稚園教育百年史』p.960に「明治39年4月及び7月号」とあるのは誤りである。なお同要項は『京阪神聯合保育会雑誌』第17号, 1906(明治39)年7月, pp.33-47にも一部転載されている。
  - 27) 「小学校教育方針」において「機会拡張主義」は、児童の事実に基づく教育の主義として「機会均等主義」とともに併記されている(『心の玉』第10号, p.219.)。
  - 28) 遊戯は「保育事項中」が「保育時間中」となり、唱歌は「聴覚発声及呼吸機関」が「各機関」に略記されるとともに「練習シテ」の「テ」と「発音ノ」が省略され、談話は「徳性啓発ノ資タラシメ」が「徳性啓発ノ資トナシ」に変わっている。
  - 29) 「明治四十四年度保育日誌 二ノ組」では4月17日に「本日より会集に談話をなし」, 12月1日に「会集の談話」等とあることから、同年度まで「会話」ではなく「談話」と呼んだとみられる。
  - 30) 同上書, 2月8日, 同9日, 同12日, 3月2日の記事。
  - 31) 京阪神聯合保育会が1904(明治37)年頃、唱歌と共同遊戯を合わせ一項目とし「唱遊」として時間表に配当したとされ(国立教育研究所編, 同上書, pp.1133-1135), 今井らも研究の過程でこれを参考にした可能性がある。ただし同園の「遊唱」がどれほど共同遊戯を伴うものであったかについては確かめることができない。
  - 32) 『京阪神聯合保育会雑誌』第25号, 1910(明治43)年7月, p.29.
  - 33) 同上書, pp.7-13.
  - 34) Temple, A.: The occupations of the kindergarten, *Elementary School Teacher*, Vol.14, No.10, 1909, pp.397-409.
  - 35) Parker, S. C.: A The History of Modern Elementary Education, Ginn and Company, 1912, pp.460ff., esp., pp.474-478.
  - 36) 同書への添え書きは西口(西口槌太郎『及川平治のカリキュラム改造論』黎明書房, 1976, P.484)の推定以来、及川のものであるとされている。しかしこの時期における史料を通覧する限り、「保育方針並ニ幼稚園内規」以外の史料への添え書きは見出されるが、同書へのそれが今井本人のものであることを否定する理由は見当たらない。
  - 37) ただし影響を受けたのは及川からだけでないであろう。例えば「製作」への添え書きで「模倣製作」から「考案的(想像的)製作」への段階を記し「製作題目」とした部分は、東基吉による「手技をなさしむる方法」の記述を想起させる(同『幼稚園保育法』1904(明治37)年, p.274-277(岡田正章編『明治保育文献集』第7巻, 日本らいぶらり, 1977所収))。
  - 38) 「要項」と銘打ってあるが二つの組の幼児による手作りの作品集である。「製作」に関する説明等は特に付されていない。
  - 39) 『心の玉』第10号, p.218.
  - 40) 同上, p.221.
  - 41) 1911(明治44)年7月に小学校令施行規則の一部改正により保育事項に関する規定が削除され、保育内容への規制緩和が図られたが、同園の実践にはその直接的な影響は暫くみられない。
  - 42) 『京阪神聯合保育会雑誌』第25号, 1910(明治43)年7月, p.29.
  - 43) 国立教育研究所編, 同上書, p.1134.
  - 44) 「明治四十五年度幼稚園日誌」, 4月13日の記事。

## 謝 辞

本稿の執筆にあたり、神戸大学発達科学部附属幼稚園の岸本佳子副園長、同附属明石小学校の都倉功充主幹教諭、そして同明石附属校園カリキュラム開発研究センター研究員の義根益美氏に、史料閲覧のうえでの上ないご配慮を賜った。慎んで感謝申し上げる。義根氏による史料保存に向けた地道な作業に敬意を表するとともに、作成後100年を迎える「保育方針並ニ幼稚園内規」を含む同校園所蔵史料の保管と活用のための条件が、今後いっそう整備されることを祈念したい。



# Cooperation between Kindergarten and Elementary School in the case of the Affiliated Schools of Akashi Women's Normal School —“The Childcare Principle and Kindergarten Bylaws” and the Kindergarten Curriculum in Meiji era—

Hideki SUGIURA\*

## ABSTRACT

In the history of education in Japan, the Affiliated Kindergarten and Elementary School of Akashi Women's Normal School is famous for its innovative education that the principal Heiji Oikawa led in the Taisho era. There we can find evidence of interactive cooperation on school duties and training undertaken between the kindergarten and elementary school since 1904, when both schools were established. In addition, since 1924, in the Taisho era, the practical attempt to link the kindergarten's curriculum with elementary school's had been carried out by Oikawa, through adopting project methods. Such a case was rare in that period. The purpose of this study is to illuminate the process of that practice for a full-scale cooperation of both affiliated schools.

This paper is the first report of the study. Here, the process of kindergarten curriculum development in the Meiji era is described from the viewpoint of the kindergarten teachers, through newly interpreting the contents of historiographical materials in this kindergarten, including “The Childcare Principle and Kindergarten Bylaws”, which was introduced by Ministry of Education and Culture's “Hundred Years History of Kindergarten Education” (1979) in Japan. Finally, on the bases of this description, the essence of this kindergarten curriculum is examined, in relation to the elementary school curriculum and Oikawa's opinion.

---

\* School Education